



TITLE:

## 第26回 京滋乳癌研究会

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第26回 京滋乳癌研究会. 日本外科宝函 1993, 62(5): 281-283

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/203687>

RIGHT:

## 第26回 京滋乳癌研究会

日 時：平成5年7月24日（土）

場 所：平安会館

当番世話人：大津赤十字病院外科 小川 博暉

## 一般演題

座長 小川 博暉

## 2) 乳腺分泌癌の一例

京都第二赤十字病院 外科

## 1) 巨大繊維腺腫の2例

大津赤十字病院 外科

杉山 昌生, 小川 博暉  
下郷 司, 泉 冬樹  
井田 純, 森 章  
田村 淳, 小切 匡史  
柳橋 健, 馬場 信雄  
坂梨 四郎

山崎 純也, 竹中 温  
徳田 一, 三宅 智子  
岩田 安司, 松村 博臣  
小出 一真, 柿原 直樹  
近藤 浩之, 矢田 裕一  
井川 理, 加藤 誠  
泉 浩, 藤井 宏二  
高橋 滋, 松繁 洋  
新畑 幸

京都第二赤十字病院 病理部

加藤 元一

最近我々は、希に著しく大きな腫瘤を形成する繊維腺腫（巨大繊維腺腫）の2症例を経験したので報告する。

【症例1】20歳，女性．右乳房の腫大，掻痒感，皮膚の発赤出現にて来院．吸引細胞診にて Class II．超音波，CT で悪性葉状肉腫の疑いあり，手術施行．腫瘤は被膜を有し，容易に剝離可能で，乳腺腫瘤摘出術を施行．腫瘤は  $14 \times 14 \times 14$  cm, 1390 g で，組織的には，細長い管腔を作る乳管上皮と繊維性間質に富んだ像であった．

【症例2】17歳，女性．右乳房腫瘤増大にて来院．超音波，CT で悪性所見なかったが，腫瘤が巨大なため乳腺腫瘤摘出術を施行． $12 \times 9.5 \times 3$  cm, 220 g の平滑な腫瘤で，乳管上皮と間質の繊維性増殖の像が認められ，2例とも病理組織学的には巨大繊維腺腫であった．巨大繊維腺腫は，比較的若年者に多く，時に多彩な病像を示し，葉状肉腫，悪性腫瘤との鑑別が大切である．

乳腺分泌癌は，本邦で，17例，欧米で70数例の報告を見るに過ぎない稀な疾患である．今回我々は，乳腺分泌癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する．

【症例】69歳，女性．人間ドッグにて左乳腺に腫瘤を指摘され，理学的所見では， $1.6 \times 1.4$  cm の弾性硬，境界比較的明瞭な腫瘤を認めた．超音波検査，マンモグラフィーで，境界一部不明瞭な橢円形の腫瘤を認めた．穿刺細胞診では，class 3であったが，画像上悪性が否定できないため，摘出生検を行った．病理組織では異型細胞は甲状腺濾泡類似の不規則な cystic pattern をつくり，PAS 陽性ジアスターゼ消化試験陰性の分泌物が認められ，secretory carcinoma の診断に至った．手術は Patey 法で行った．(T2, n0, M0, stage 1) ホルモンレセプターは，エストロゲン陽性，プロゲステロン陰性であった．

術後経過は良好で，化学療法施行し，現在再発もなく外来通院中である．

### 3) 乳癌脊椎転移における MRI 診断の検討

京都市立病院 外科

岡村 隆仁, 向原 純雄  
竹内 恵, 西鉢 隆太  
梁 純明, 余 玖哲  
中山 裕行, 片岡 正人  
横山 正, 田中 満  
野口 雅滋, 間嶋 正徳

【目的】進行乳癌症例は全身病的性格を持ち、しばしば担癌状態で長期に経過する。特に、骨転移は頻度が高く、激しい疼痛や病的骨折などをきたし、患者の quality of life を著しく損なうので、早期診断および治療のための正確な局在診断を必要とする。今回我々は、骨転移の中でも最も頻度が高く、また単純X線写真にて診断の困難な脊椎転移症例に焦点を当て、MRI の有用性と問題点を明らかにした。

【対象・方法】骨シンチグラムにて脊椎転移が疑われた7例の MRI 所見を骨シンチグラムおよび単純X線所見と比較検討した。

【結果・考察】7例の病変における MRI 信号強度を正常骨髄と比較すると、T1 強調像では全例低信号を呈したのに対し、T2 強調像では4例で高信号、3例で高低混在した信号強度を呈した。一般に T1 強調像の方が T2 強調像よりも多くの病変が早期に診断できる傾向にあった。また MRI、シンチグラム、単純X線の3検査の比較検討では、MRI とシンチグラムで全例転移巣が摘出されたのに対し、単純X線では3例検出されたに過ぎなかった。このようにシンチグラムは MRI と同様病変検出能は高かったが、質的診断は困難であった。一方、MRI は、任意の方向の断層像が得られる上に、脊髄、椎間板、骨髓内などの軟部構造が詳細に描出されることから局在診断に優れ、乳癌脊椎転移の診断において非常に有用であると考えられた。

### 4) 当施設におけるリンパ節転移陽性乳癌症例の予後と術後補助療法

京都府立医科大学 第二外科

谷口 史洋, 大坂 芳夫  
中井 一郎, 鈴木 茂敏  
安村 忠樹, 岡 隆宏

今回我々は、当施設におけるリンパ節転移陽性乳癌

症例99例について検討いたしました。現在術後さまざまな adjuvant 治療が試みられているが、stage I の患者においても再発する例がある。一般にリンパ節転移陽性の場合再発する事が多く、n 因子の程度が予後を左右する。そこでリンパ節転移陽性症例の背景因子 adjuvant の組み合わせ、期間等について検討してみた。さらにアドリアマイシンによる adjuvant 療法の試みについても検討した。

### 5) 肺転移にて再発後、癌性胸・心嚢膜炎を繰り返しながら11年8ヶ月間長期延命の得られた乳癌の1例

京都警察病院 外科

堀 泰祐, 大垣 和久  
京都第二赤十字病院 外科  
藤井 宏二, 竹中 温  
徳田 一  
京都府立医科大学 第一外科  
澤井 清司

乳癌再発後10年以上長期生存する症例は少ない。我々は肺転移にて再発後、予後不良といわれる胸・心嚢膜炎を繰り返しながら再発後11年8ヶ月間の長期生存が得られた症例を経験したので報告する。

【症例】初発時36歳、未婚女性。既往歴、家族歴に特記すべきものなし。初診時所見は T1aNOm0、手術術式は Br+Ax+Mj+Mn(R2)、手術所見は t1n0m0, sal, ER, PR 測定せず。術後 PS に  $^{60}\text{Co}$  radiation 7000 rad, FAMT×5 施行。その後、adjuvant は行わず経過をみていたが、術後11年目、両肺（特に上葉）に微小結節陰影と心陰影の拡大（心嚢液）を認めた。TAM 20 mg/d, OK432 5KE/w, ADR 40 mg×4 にて右上葉小結節以外の陰影の消失をみた。心嚢液は Class II で、Steriod の投与にて減少した。以後 TAM 20 mg/d, PSK 3.0 g/d の投与のみにて肺転移の進行は極めて緩慢だった。術後17年目、左胸水を認めたため胸腔内 OK432+AIT 療法を行い、細胞診 V→I、胸水の完全消失が得られた。TAM 20 mg/d, OK432 5KE/w にて経過を見ていたところ、術後20年目、心嚢液貯留を認めたので、心嚢内 LTN+AIT 療法を施行、細胞 V→I、心嚢液の消失が得られた。術後22年目、肝転移を認めたため、5'DFUR+CY+MPA 投与等を行ったが、肺転移の進行による呼吸不全のため、初回手術後22年9

ヶ月、肺転移後11年8ヶ月で死亡された。

乳癌再発後長期生存の条件として、初発時50才以下、臨床病期Ⅱ，T2，n1a 以下，無病期間3年以上，再発部位として軟部組織，骨転移あるいは初回治療によく反応する肺転移，早期に切除した局所再発，またホルモン療法によく反応するものなどがあげられているが，本症例もこれらの条件のうちいくつかを満たしていた。しかし，予後不良と考えられる癌性胸・心嚢膜炎を併発したにもかかわらず AIT を含む免疫療法が著効を呈した点が注目される。再発乳癌に対してもあきらめることなく，適切な治療が大切と思われた。最後に，AIT 療法を実施していただいた京大第一外科の菅典道先生をはじめ，第17研究室の諸先生に感謝いたします。

## 6) 局所進行乳癌の動注免疫化学療法

京都大学 第一外科

菅 典道，原田 武尚

一ノ瀬 庸，森口 喜生

李 利，杉江 知治

今村 正之

吉川病院

佐藤 剛平

乳腺クリニック児玉 外科

児玉 宏

1986年以後，Stage III 11例・Stage IV 9例計20例の局所進行乳癌に術前治療として OK-432，化学療法剤，培養自己リンパ球移入の併用による動注（鎖骨下または内胸動脈内）免疫化学療法を試みてきたのでその結果を報告する。

【方法】既報のごとき投与順にて2コース32日間の治療を標準とし，Stage IV の4例に1-2コースの追加治療を行い，Stage IV の一部ではその転移巣に対する局所免疫療法を加えた。

【結果】Stage IV の8例，Stage III の3例に50%以上の腫瘍縮小が得られ，増大例は無く，Stage IV の4例で腫瘍が消失した。治療後50%生存期間は Stage III 25ヶ月・Stage IV 56ヶ月，培養リンパ球への自己腫瘍抗原添加例56ヶ月・非添加27ヶ月にて特に Stage IV 症例に長期治療を加えた場合に有意義であった。更に Stage III で胸筋温存乳房切除可能例が4例，Stage IV で乳房非切除例が3例あり，QOL の観点からも有望と考える。